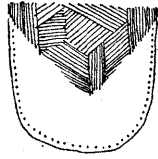


# 近代短歌に現われた子ども

(九)



大塚  
雅彦

(17) ちの  
茅野雅子

今回から閨秀歌人たちを何人かまとめて見ていこう。与謝野晶子ほどの巨星とはいえないが、いづれも近代短歌史上、ユニークな活動と作品を示した女流たちである。

茅野雅子は本名まさ、明治十三年五月、大阪市東区道修町どしやうの薬種問屋増田家の娘として生まれた。生家は順血湯本舗の古い店である。堂島女学校、相愛女学校をそれぞれ中退、その後、明治三十七年上京して日本女子大学校（当時）国文科に入学、四十年春卒業し、同年夏、東大生で「明星」同人であった信州出身の茅野儀太郎（蕭々）と結婚した。夫は後にドイツ文学の泰斗となり、ゲート研究等で知られた詩人学者である。彼が旧制

三高の教職に就いたので、夫と共に京都に赴いて住んだ。大正六年夫が慶大教授に転じたので共に上京した。

大正十年より彼女は母校の日本女子大学校国文科教授となり、「中古文学」や「作歌」を担当した。翌十一年、

夫も同校教授を兼ねるに至ったので、「仲のよいおしどり夫妻」（青木生子『茅野雅子』昭43・6）として知られた。昭和二十年空襲による戦災をうけ軽井沢に避難、戦後上京して母校の寮内に仮寓し、学校の復興に起ち上ろうとしたが、翌二十一年八月二十九日夫が脳溢血で急死、雅子もまたそれから僅か数日後の九月二日のしかも同時刻に長逝した。享年六十七才、病名は肺結核である。共に現職のままほとんど一緒に逝去した夫妻の告別式は日本女子大の大講堂で行われたが、偕老同穴の古い喩を想起させる。まことに安倍能成が述べている如く「この夫婦は外にちょっと類のない珍しい一對」であり、「哀しい、切ない、深いきづなに繋がった夫婦」（安倍編『蕭々雅子遺稿抄』昭31・11）であったといえるであろう。

雅子は少女時代から「文庫」に早く投稿していたようであるが、明治三十三年（二十一才）「明星」に移り、やがて与謝野晶子（明治11年生）・山川登美子（明治12年生）・増田雅子（明治13年生）の各一才違いの三才女は「明星」女流の中でも特に頭角を現わすに至り、後に合著歌集『恋衣』（明治38・1刊）を刊行するようになるのである。「明星」廃刊後は「スバル」に短歌のみならず、詩や小説をも発表し、また「青鞥」にも作品を発表した。その後「婦人の友」の和歌選者になったのを始め、多くの雑誌・新聞の選者をした。大正七年には「春草会」という短歌会を組織したり、昭和十二年には「茅花会」を主宰して弟子たちを育成した。こんにち歌壇で活躍している女流歌人の中には、その門弟が少なくない。著書として唯一の単独歌集『金沙集』（大正6・1刊）があり、また、夫と共著の隨筆集『朝の果実』（昭13・11）がある。前述の安倍能成編『蕭々雅子遺稿抄』も参考になろう。研究書としては青木生子博士（現日本女子大学々長）著『茅野雅子』がまとまった唯一のものとい

つてよい。

雅子の歌風は初期と後半生では変化があり、一概には論じられないが、「新詩社に欠けている自然詠風の叙景的な要素」（青木氏）があり、晶子や登美子とは異った特色を示している。優婉のおもむきを湛え、清楚であり、人柄と育ちの良さを示す温雅さを持っていて、「内に激しい情熱を秘めていながらも、それと同居する温良さ」（青木氏）が読者を惹きつける点がある。

① 白百合の蔽ふと見たる夢のまにわが子よわれは母となりぬる

② 六歳の子の母なる今もそのかみの夢よりさめずひな芥子の花

③ をさな児の遊びの如く美しく真実こめて世に生きてまし

④ 病ゆゑもののおはれをいち早く知りそめし子をかなしと思ふ

⑤ はろかなる岸に手をふるわが子見ゆこころいらだつ  
甲板かんばんにして

①は「明星」終刊号（明治41・11）所収。「新詩社詠

草」四十三首中の一首である。雅子は明治四十一年五月、長女晴子を生み、九月に前述の如く夫の赴任と共に京都に來住し、その後の数ヶ月の作品がこの詠草として発表されたわけだが、若い母として始めて人の子の親となった戸惑いや驚きや感傷や不安等が、新詩社風の上句の表現などに現われているといえよう。「汝が母はをかしわが子よ汝を見れば涙するなり何ならなくに」「木の葉ちりをかしき秋の何故か今年は悲し人の子の母」等の作品もある。また雅子はこの頃書いた小説「親ごころ」（「家庭」2巻3号、明治43・2）に、ヒロインの町子に托して、子を産んだ若い母の心境を詳しく描いているのも参考になる。

②は『金沙集』所収で、「母と子」の中の最初の「若き母」一連十九首中の一首。「恋愛至上の心や、母としての矛盾、若きあこがれ心が多くいだかれています」（青木、前掲書）というべく、六才の子の母親となっている今もなおその昔の少女時代の夢からさめない、というの

である。この前後に「人の子の母なる故か風にとぶ草の実にさへ心ひかるる」「うら若き夢の数多は消えねども二人の母となり果てしかな」等の作品が載っている。浪漫の夢がさめない一方、やはり風に飛ぶ草の実にも心いかれる母情というものを自覚しているのである。「二人」というのは長女晴子と、大正二年に生まれた次女多緒子である。

③も同じく『金沙集』所収で「母と子」末尾一連十九首中の一首。後年、自選集にしばしば入れ、乞われるとよく短冊に書いた歌であり、得意な作品だったのであろうし、集中の佳作といえよう。古泉千樞の項で指摘した『梁塵秘抄』中の、子どもを詠じたうたに基調が似通うものがあるが、青木博士は「若き妻、若き母の哀歎を歌いあげた『金沙集』は、詮じつめればこの「美しく真実こめて世に生きてまし」という雅子の悲願の底から生まれた声である」と述べている。

④は「婦人の友」14巻12号（大正9・12）所収。長女晴子は病いがちであったが、必死の看病の甲斐もなく、

大正十二年、僅か十六才で夭折した。魂の早く発達した感受性鋭い少女で、多くの文章や詩歌等を書きのこしていたという。雅子は悲しみのどん底に落とされ、「母としての資格がない」と自らをとがめ、「死ぬことを最も安き一つぞと」すら思い続けたようである。この歌も、そうした生前の愛児晴子に対する母性愛が滲み出た哀切な作品である。

⑤は「婦人の友」20巻1号（大正15・1）所収。雅子は、先にドイツに留学していた夫蕭々のあとを追って、大正十四年二月渡欧し、欧州各地を巡り、十一月十日榛名丸で帰朝した。これはその折の作である。岸で手をふっているわが子を早く抱きたい焦りが、眼に見えるような歌である。「幾万里海を渡りてかへり来ぬひとりのこの子いだかんがため」という作品もある。若くして死んだ姉娘を忘れられない想いもオーバーラップされて、「ひとりのこの子」という一語にこもっているように思われる。

(18) 原阿佐緒

原阿佐緒は本名あさを、明治二十一年六月宮城県黒川郡宮床村（現大和町）宮床の素封家、原家の一人娘として生まれた。生家は塩や麴の販売を業としていた。宮城県立高女を病気のため中退して上京、日本女子美術学校、奎文女子美術学校等で日本画を学ぶ。その美校の教師で翻訳家でもあった小原要逸（号は無絃）と不幸な恋愛をし、長男千秋を生む。間もなく彼と別れたが、大正三年、郷里で画家の庄子勇と結婚し共に上京、次男保美を生んだ。この頃、上京と帰郷を繰返していたが、庄子とも間もなく離婚した。その後、東北帝大教授の物理学者でインシュタインの相対性理論を日本に紹介した石原純博士（アララギ派の歌人）と相知ったが、妻子のある博士との恋愛事件が大正十年マスコミによって大きく報じられ、この事件は世人を驚倒させ一世を風靡した。彼女は千葉県保田海岸の博士の別荘で博士と数年間同棲したが、結局別れて帰郷した。その後上京してからはマ

ネキンガール、バーの経営、映画女優等の浮草的とも見える生活を繰返したが、これも彼女の天成の美貌や名声を利用された面が強かったようである。しかし晩年は、昭和二十九年頃から映画俳優の次男原保美（夫人は中川一政画伯の令嬢）夫妻に引取られ、「老年の平安」「心安けき晩年」（吉屋信子『ある女人像』（昭40・12））を得た生活を送ったらしい。昭和四十四年二月二十一日死去、老衰による心不全であった。八十才である。

彼女は前述の如く三回も不幸な恋愛や結婚をし、その他に歌人古泉千樫との恋などもつたえられ、「恋に弱い」（吉屋、本掲書）女、今の語で言えば「恋多き女」として中傷や誹謗にさらされがちであったが、ジャーナリズムに騒がれて実像よりも虚像がつたえられる面も多かったのではあるまいか。私は戦後一度、彼女を見かけたことがある。東京・新橋の喫茶店であった。息子の原保美と一緒であった。保美氏を私はスクリーンで何度か見て知っていたから、すぐわかった。彼女は小柄で、品のよい老婆という感じだった。これがあの一世を驚かせた恋

のヒロインの果てなのか……と、私は感慨をもって見つけたのを、おぼえている。

彼女は明治三十九年頃より「明星」を耽読し、四十一年頃より作歌に熱中し始め、翌四十二年「新詩社」に入り「スバル」等に歌を発表した。次項で述べる三ヶ島霞子とはこの「スバル」時代から親しく、後、二人ともアララギ派に移ってからも親友であった。大正二年「アララギ」に移り、歌風も変化した。その後、大正十三年「日光」同人となったが、晩年は歌を廢し、歌壇からも忘れられたような存在であった。歌集には『涙痕』（大正2・5）、『白木槿』（大正5・11）、『死をみつめて』（大正10・10）、『うす雲』（昭和3・10）等がある。数奇なる運命にもてあそばれた苦難の人生の中で、愛児に充分に愛を注いでやれない悲しみをせつせつとうたった作品が少なくない。

① 逢へばみなふるさととはただにわが児をほめて往ぬはた寂しかり

② 吾児居ねばひとりこもりてこの母は茶碗に乳をしほ

りぬにけり

③ 吾子かなし田舎なまりのものいひに人笑はせつ電車の中に

④ 待つといはば心みだれん片仮名の児が手紙すら得がてにを経つ

⑤ やうやくに心和ぎたれど眠られずひたすらに吾子が寝顔を描くも

⑥ 吾が友にあはれがれつつはれやかに街を急げり子が衣を持ちて

①は歌集『白木槿』所収。阿佐緒は前述の如く明治四十年に長男千秋を生んで、千秋やその父親である小原要逸と共に帰郷した。これはその頃の作であろう。実は小原には妻子があったのであり、そのことが判ったのは阿佐緒の妊娠後であった。つまり、この子は当時の語でいへば私生児だったのである。村人たちは逢えばこの子をほめて去ってゆくが、この子の運命も、その母である作者自身の運命も薄倅のものである、という寂しさを噛みしめていたのが此の歌であろう。

②も『白木槿』所収。この「吾児」は大正四年に生まれた次男保美であろう。阿佐緒は妊娠により身体が甚しく衰弱したり、産後の肥立ちも悪く、母に伴われて東京から郷里に帰ったものの、元来の病弱と産み疲れのため東北帝大付属病院に入院するに至った。退院後も仙台の親戚に身を寄せ約一ヶ月通院した後、やっと帰宅するありさまだった（小野勝美『原阿佐緒の生涯―その恋と歌』昭49・11による）。この歌はその頃のいづれかの期間、子どもと離れていた折の作であろうか？ 歌意は明瞭で、殊に下句が、赤児と離れて孤りいる母親の、張る乳房から乳を茶碗にしぼるといふ悲痛な動作を具体的に描いていて、あわれを誘う。この頃の歌に「わが背子は遠し児はまだ乳ばなれもせぬにはや病みそめし秋」というのもある。

③は歌集『死をみつめて』所収。阿佐緒は当時不和になっていた怠け者の夫の庄子勇に絶望して、独力で働いて子供の養育料を得るべく、赤子の保美を預けて上京し、本郷の書店の事務員となつて働いた（小野、前掲書によ

る）。これはその頃の歌であろうか？ わが子が田舎方言でものを言つて電車の中で乗客たちを笑わせた、というのであるが、あるいは此の歌の「吾子」というのは、当時十才くらいになっていた長男千秋であろうか、次男保美は当時未だ満二才くらいであるから―。この頃の歌に「ひさびさに相見し吾児を心ゆくまで抱きもあへず勤務に出でゆく」「なげきつつ我のいへればききわけてうなづく吾子を往かしめがたし」という作もある。

④は歌集『うす雲』所収。巻頭の「夜を鳴く鳥」の中にあり、この一連には「この一篇をわがためになしみを負へる女性に捧ぐ」の詞書がある。この歌集は石原純の序文があるのだが、阿佐緒は既に彼と千葉県の保田で七年の同棲をしていた。しかし、遠く離れて故郷のみち、くに居るわが子の片仮名で書く手紙すら得ることが困難である日々を送った（「得がてにを」の「を」は添字的な助詞）という状況で、それを思うと心は果てなく乱れるだろうという歌意は、恋に生きながら子供に惹かれる、いうなれば「女」と「母」の分裂に身を焼き、男を

愛する心とわが子を思う心との二律背反に悶える女性の心情を告白しているわけで、それ故にこそ、天下の女性たちに捧げようという詞書の語を書けつけたのである。しかし、一、二句あたりの表現は通俗性を感じさせ、作品の調子を浅くしている面もある。

⑤も『うす雲』所収。「合離抒情（其の四）」の中にあり、この「合離抒情」は四部に分れていて、各連とも吾が児との離居、邂逅を綿々とうたいあげている。この歌の前に「別れ去なむ吾子と思へば寝顔だに切に愛しく吾が描かんとす」があるから、去ろうとする愛児との別れのためにつらい気持を抑え、ようやく自分を納得させて心は和らいだ筈なのだが、やはり眠られないので子供の寝顔を描くというのである。阿佐緒は前述の如く始め美術学校で絵を習ったのであり、昭和初年に自画像なども描いており、この歌集『うす雲』の巻頭にも、自ら描いた椿の絵を収めている。これらの哀別離苦の想兒詠は、今日読んでみると、何か新派悲劇的な感じすらあって文学的造型度が低く、近代性や知性に乏しい作品という感

がなくもない。しかし福田清人氏も述べているように（小野、前掲書に氏が付した序文）、「女性解放前の社会の重圧の中に、自ら解放しようとして生き抜き、戦い破れ挫折したかに見える明治生まれの女性の悲劇的な生涯」の記録の一端と見れば、歴史的な意味もあるのではなからうか。⑥も『うす雲』所収で「遠き子に」一連の中にあり、「人にひそかに子が衣を買」い、それを持って、友にあわれまれながら、心晴れやかに街を急ぐという情景の詠出は、やはりまぎれもなく、古今を通じて変らぬ女性の歌であり、母性の色濃く刻印された作であって、一見はなやかでエキセントリックな生涯をたどり、石原純との事件では「普通の女性とは異った特殊の婦人」と新聞に書かれたり、果ては「悪魔」「妖婦」とまで罵られた一人の女性も、このようにわが子をおもう哀情を短歌に念々にうたいこめていることに、あらためて私は思いたらざるを得ないのである。

（お茶の水女子大学）